特集②

「一人暮らし」のバラード

自分の個室ができた日のことをいまも覚えている。
やっと認めてもらったような、自由を手に入れたような開放感。
ただのダラけた日常と化すまでに時間はかからなかったような気もするけれど。
そんな“個室幻想”からすると、親元を離れての「一人暮らし」は
＜自分の城＞ができたようなものである。実家からの通学派にはどこかうらやましい。
食う寝るところに住むところ。＜自分の城＞の住み心地は？　と聞いてみた。
キレイ、キタナイ、夢と現実、心のときめき、あるいは侘しさについて。

学生記者取材班

はじまりのモノローグ

はじまりのモノローグは法学部新2年、男子。鹿児島県出身、薩摩隼人である。題して――「上京1年目、東京の冬」。

あぁ、一人だ。最後の一人を見送って、散らかったコタツを見つめる。大学生という生き物はどうやら鍋が好きらしい。この3日間は、入れ替わり立ち替わり訪れてくる友人たちと毎日毎日、鍋である。学校近くのアパートを選んだせいか、毎日一人でさびしいだろうと想像していた一人暮らしは、意外とにぎやかなものになっている。

「なんだ、一人暮らしなんて、こんなものか」

実家にいたころ、広い家の中には常に「誰もいない部屋」があったので、ユーレイや不審者がいるのではないかと、本気で心配していた。上京することが決まった時も、まずそのことを心配した。しかし、一人暮らしを始めてみると、部屋はワンルーム。どこにいても、部屋を見渡せるのだ。実際は、ユーレイに脅えることも、不審者に脅えることなどなかった。強いて言うなら、「ちょっとうるさいんですけど」と言ってきたお隣さんに脅えるくらいだ。

しかも、今年は暖冬らしい。「東京は寒いよ」と言われたから、身構えていたのに。これじゃ、九州と変わらない。みんな寒い寒いと言うけれど、そうでもないじゃないか。近ごろでは、バイトも始めた。「お前は、東京で騙される!!」と高校の先生に言われ、警戒していたバイトだったが、ちゃんと給料ももらえている。東京も案外、平和なものである。まぁ、ここは東京のはずれなのだけど。

一人暮らしは、想像していたものと大分違う。でも、ボクはこんな生活が気に入っている。まわりにあんまり店がないことも、あんまりうるさくならないように気をつけることも、べつに嫌いじゃない。

一人暮らしももうすぐ1年。なんだかクサイことを言うようだけど、授業を一緒に受ける友だち、サーク

ルのみんながいる限り、一人なんかじゃない。「あぁ、やっぱ友だちっていいわ」

「東京はコワイ」とこ？　故郷のオカンやオトンに送られて

リリー・フランキー著『東京タワー　オカンとボクと、時々、オトン』に、こんな文章がでてくる。

《世の中に思ひあれども子をこふる　思ひにまさる思いなき哉

それでも子が一人立ちしていくのは、親子関係以上の何か、眩しく香ばしいはずの新しい関係を探しにゆくからだ》

旅立ちの朝、「東京は怖いとこだよ。気をつけてね」と送り出すのも、ふるさとの父・母の親心である。

「ぼくは、駅のホームは危ないからね、と言われちゃってさ」と照れるのは、文学部2年、中野憲良さんだ。

たまんないな、この窮屈感ゆえの親密感

中野さんは三重出身。都会から離れた場所からみると、東京は、人が多く、危険な都会というイメージがある。でも、東京での一人暮らしに憧れた。上京する孫に、心配性のおばあさんは、こう忠告したそうだ。

「駅のホームで前に出すぎちゃダメよ」

落とされる危険があるからね、と。なにかスパイ小説もどき。ま、そんな事件や事故もあったのは確かだけど。

家賃は4万6000円だ。6畳のワンルームにベランダ。坂の多い程久保から徒歩で大学に通っている。一般入試が終わってからのアパート探しは少し遅かったようだ。「坂がなければいいのになぁ」と漏らす。それを言っちゃオシマイですよ、中大生は。

大変なのは食事。一人暮らしをはじめたばかりのころは、家の田んぼで穫れる米（兼業農家だそう）が送られてきて、すぐに平らげていた。

だがもうご飯を炊くことも月に1度あるかないか。「生ごみが出ない生活、ハハハ」という次第である。ガスの元栓も締めたままで、久しく触っていない。冷蔵庫にも「缶コーヒーがあるだけかなぁ」。なにしろ、家にはほとんどいない、のだという。

一人で家にいる時間よりも、所属している弓道サークルやプロジェクトコープの仲間と過ごす時間を大切にしているらしいのだ。友だちや先輩が家に来ることは？　「時々ありますけどね。この前先輩が家に来た時は、ベッドがひとつしかないから、先輩にベッドで寝てもらって、僕は床で寝ていたんですけど、なかなか眠れなくて結局コンビニで時間をつぶしました」

普段、サークルやプロジェクトコープの仲間たちといるぶん、帰ってくると少し寂しい。そんな気分を紛らわすために六本木で買ったのがドラえもんの人形。顔だけなのだが、あるとちょっぴり落ち着くらしい。買ったばかりの時は、買ったことを忘れて誰かいるのかとヒヤっとしたこともあったらしいが、今では立派な同居人である。

ホームシックはないし、大学のある多摩は自然が多くて安心できるという。ただ、消防車やパトカーのサイレンを聞くのが三重よりも多い。人びとが「セカセカしている」ところも気にかかる。

「山手線は3分に1本電車が来るのに、どうして走ってまでして乗るんだろう、と思いますね。三重では

1時間に1本。電車の本数がないなら走るのも分かりますけどね」

私は見た！　ヘンな男が…事件ドキュメント

東京も案外、まして八王子だから「コワくはない」か。

そう断言することもできない。2年ほど前、一人暮らしマンションを狙い水漏れ点検を装った男の侵入事件が連続し、大学も異例の警戒を呼びかけたほどだった。

そして、「私は見た！　ヘンな男が目の前に！」。

ドキュメントでつづる、ある女性学生記者（3年）が遭遇した事件の瞬間である。

ガチャガチャ、ガチャガチャ。外で不審な音がする。玄関ドアから1本の通路で通じている部屋から飛び出し、廊下を音を立てずに小走りした。ドア穴から見えたのは中年の作業服を着たオジサン。何してるんだろう。備え付けの消火器交換かなぁ。

なおも妙な音は続く。オジサンも外にまだいるようだ。怪しい……。まさか、カギを開けようとしてる？

それだったら怖い、怖い。どうしよう。そのとき音が止んだ。ホッとしたのも束の間、オジサンが1階に向かって呼びかけている。「おーい、針金がいるようだわ」。えっ、針金を使うって？　これは明らかに不審者だ！

しかし動転して頭が働かず、行動が伴わない。ドア穴を覗いて、不審者をチェックすることしか浮かばない。すぐに先ほどとは別のオジサンがやってきた。うつむき加減のオジサンが何かしら行動を始めると、ドアが振動する。これが、空き巣というやつか！

自分で追い払うしかない！　一人暮らしだもん、使えるものは自分の勇気だけ！　ドアをバンッと勢いよく開く。もちろん全開ではなく、チェーンはしたままカギだけ開けて。その辺は冷静な思考が伴った。10センチほどのすき間からオジサンの驚愕した顔を睨む。

モニターからのシュール？な眺め

「あ、あの、何してんですかっ！」

「えっ……ここ○○○号室ですよね？」

「そうですけど、何でドア開けようとしてるんですかっ！」

しばし無言になるオジサン。空き巣と真っ向から対決する私。強いかも。

「……間違えました！」

間違えた、って何だよ！　オジサンは走り去る。階段を逃げるように降りていく。

終わった。オジサンが消えた後、恐怖心に包まれた。オジサンの右手に光っていたのは、この部屋のカギと似ているものだった。ぞっとする。警察に電話をした。

「おそらく空き巣でしょうね。聞き込みの結果、アパート10部屋のうち、その不審者が来たのはお嬢さんのところだけだそうです。若い女性ということもありますしね」

しかし、と警官は続けた。「この世の中、チェーンをしたままでもドアを開けることは信じられませんな。もうそんな危険なことはやめてくださいよ。相手が刃物を持っていたら、刺されてますからね」

……一気に体温が下がったような気がした。

いないフリをして、そっと110番する。そうすれば、すぐに警察がかけつけて現行犯逮捕できる。そういう手があったか。あの行動は勇敢なことではなかった。無鉄砲ということがふさわしい。

しかし危険な時代。早速、翌日ドアに不審者撃退アラームを設置した。迅速な対応が大事です。

お風呂に満足
お洒落な日々の過ごし方

「お風呂に満足しています」と、風呂上がりのさわやかな声も聞こえる。

法学部3年、K子さんのお部屋から。

多摩センターの駅からゆっくり歩いて15分。築2年のC's（中大生協がオーナーとなり中大生のために建てたマンション。現在大学周辺に40棟近くあるらしい）。外観もピカピカである。

なにも物件紹介する気はないのだけれど、白を基調とした内観。木目調の家具と白い家具が見事にマッチしていておしゃれなのだった。

この部屋で気に入っているところは？　「お風呂とトイレが分かれているところかな。洗面台が独立しているところも」

机もスベスベ、さぞ勉強も…

以前住んでいた部屋はユニットバスで、冬でもシャワーしかできず、寒くて耐えられなかったそうだ。分かりますね。で、1年次の冬に引っ越して、いまはお風呂タイムを楽しんでる？　「もちろん」とニッコリ笑顔が返ってくる。

部屋の中でこだわった部分は？　うーん、としばらく考えた後、彼女は大きな机を指差した。「パソコンも置けて、勉強も十分出来るくらいの長い机にしたこと」。デスクトップのパソコンや小さな引き出しが置かれているにもかかわらず、勉強用の広々としたスペースが確保されている。これで勉強にも精が入りますね、と言うと苦笑いされた。

ドアにはのぞき穴がない。これも、最新装備完備で、来客をモニター確認できる。

「前にインターホンを鳴らしてすぐ去っていった変な人がいたなぁ。あと何かの勧誘っぽい人が来たら、これでチェックして居留守（笑）」

これなら学生記者のような〝危うく事件〟は防げそう。とすっかり安心するのも危ない。用心には用心を。

「男の部屋」
ひろびろ畳の部屋にゴロン

「男の部屋」も、この目でのぞいてみたい。

そう頼んだら、法学部3年、岩井貴顕さんは、気安く「あ、いいよ」とOKしてくれた。

キレイにしているからだろうか、キタナイんだろうか……。

玄関のドアを開けた途端、広い間取りのキッチンが広がる。これ、1人暮らしの部屋なの？　シンクや調理台も家族サイズだ。通常のワンルームアパートの2倍ほどある。「家族で住む人もいたみたいだよ」。どうりでね。

ぜいたくな台所である。料理してるの？　散らかり様から推察するに、しばらく放置気味のようだけど。「最近していないなぁ」との答え。ああ、もったいない、と狭い台所の女性記者はつくづく思うのだった。

ガラスの引き戸を開けて、隣の部屋へ入る。温かみのある和室。日当たりも抜群。大きな机が置かれていても、まだ広々としている。押入れなどの収納スペースも充実している。

「実際は6畳なんだけどね、ここに＋1畳」と角部屋にしかない空間を指差す。そこは大きな窓から光がたっぷり入るため、室内干し用の場所として使っている。珍しい作りだ。

「ここの空間と、部屋が畳だという

ことが気に入ってこの部屋にしたんだ」

高幡不動の駅から徒歩15分。橋を渡ってようやく到着。ここより駅に近い物件もあったが「背後が崖だったり、狭かったりしてさ」と振り返る。

いっとき実家（千葉県）から通学していた。だが片道2時間以上の日々はきつく、1年次の連休に物件探しをしたという。

一人暮らしを始めて何か事件はあった？　「部の先輩が深夜に『新聞でーす』と奇襲してくることが多々あった（笑）」。その後、部屋に上がってごろごろしてくつろいでいくらしい。分かるなぁ、と思わせる居心地のよさでした。

目覚めはライオンの咆哮…一人暮らしの〝王〟？

なんとぜいたくな、といえば、河野泰憲さん（総合政策学部3年）もそうである。いやそうに違いない。いながらにして、サファリ気分？

「猛獣の鳴き声が聞こえてくるんですよ」と、楽しげ気に、自慢するように。

多摩動物公園から10分。河野さんは、一風変わった一人暮らしを楽しんでいる。

「朝は象やライオン、夜は鳥が鳴いているイメージですね、お昼は迷子のお知らせが聞こえることもあります」

小高い山の上に彼の住まいがある。部屋からは高幡不動の夜景、夏には聖蹟桜ヶ丘の花火が特等席で見られるという。「そこらの観光地には負けないヨ」。わが自慢の館である。

受験が終わってしばらくは一人暮らしをするつもりはなかった。実家が千葉なので、通えないこともなかったのだ。ただ、往復6時間、終電は9時ごろ。夜ゆっくりできないのは不便である。そこで、両親のすすめで一人暮らしをすることにした。周りより少し出遅れて、3月に部屋探しを始めた。大学から少し離れた、山の上に1つ物件が残っていた。それが今の家である。彼のおばあさんが「腰を抜かしてしまった」という坂を、通学のためには毎日上り下りしなければいけないが、家賃は4万1000円（うち共益費2000円）。6畳のワンルームである。

実家が襖で仕切られていた畳の家だったので、自分の部屋ができたのは新鮮だった。はじめは畳が恋しくて、一畳分購入した。なぜ、たったの一畳分だったかというと、フトンを敷くため。一人暮らしでベッドではなくフトンを使っている人は珍しいよね、たぶん。段差が気になって畳はもう畳んでしまったが、部屋を少しでも広くと、フトンを上げ下ろしするキチンとした日常生活。

「1年生のころは模範的な一人暮らしでしたよ」と河野さん。実家にマメに連絡をし、ご飯は自炊、家計簿もきっちりつけて、学校には手作り弁当持参だったそうだ。「今は……」と苦笑いするけれど。スーパーまで距離があるので、よくネット・ショッピングを利用するそうだ。飲み物や食べ物に、日常雑貨……。これまでに買ったのは？　「本棚に、梅干、野菜ジュースの箱詰め、趣味の自転車用品、低反発座椅子も買ったよ」。一人暮らしの食事にお勧めのメニューは「CoCo壱番屋」の宅配カレー、とか。

2カ月期限付き「15分」と「2時間」通学比較論

Mさん（文学部4年・女子）は、きょうも7時前に家を出る。実家のある千葉から学校まで片道2時間の道のりだ。1限のある日は、この時間に家を出発しないと間に合わない。大学生活も折り返し地点を過ぎ、もう慣れたけれど、サークルの練習などで夜遅くなる日が続くとつらい。

そんなMさんも、この秋から一人暮らしをすることになった。バイトで貯めたお金で手に入れた念願の一人暮らし！　通学時間15分の生活！

しかし、そんな夢の生活も長くは続かない。そう、Mさんの一人暮らしは期間限定。文化祭へ向けたサークルの練習や、ゼミ活動などで忙しさが頂点に達する10月から2カ月限定だ。

期間限定の一人暮らし。以前から

男キッチン（左）にしてはキレイだけど、やはり女のキッチン（右）はちがいますね。調理器具の多さが。

彼女、料理自慢

料理などはしていたので、戸惑いはなかったが、期間限定ゆえに不便が多い。

まず炊飯器である。根っからのコメ好きで、一人暮らしでもどうしても〝ご飯〟は食べたい。でも、2カ月後には、いらなくなる炊飯器。買うべきか、我慢すべきか……そーだ、土鍋だ！　さっそく〝土鍋でご飯〟にチャレンジした。

「うわ、芯がある」。スイッチ一つで、おいしいご飯とは訳が違う。しかし、そこは料理上手のMさん、何回か挑戦するうちに〝土鍋でご飯〟は無事マスターしたという。

次なる試練は、〝量〟だ。野菜も肉も、一人分の感覚がわからない。得意の和食も、一人分だけ作るのが難しく、結局何日もかけて食べることになってしまう。まぁ、冷蔵庫の作り置きのおかげで、遊びにきてくれた友達に思わぬ形で料理の腕前が披露できたというメリットはあったが。

2カ月というのは、ちょうど物事に慣れてくるころだが、あっという間に時は過ぎ、またMさんの片道2時間通学が始まった。最近では、就職活動も始まり、電車に乗る時間はさらに増えた。忙しい毎日で、一人暮らしのことを思い出すことはないけれど、実家の台所に立ったとき、ふとあの2カ月を思い出す。

もう土鍋でご飯を炊くことも、量を気にすることもない。

「一人暮らしも楽しかったけれど、やっぱり実家暮らしも悪くないな」

包丁を持ちながら、Mさんはそんな風に思う。

「自分の城」探しという主題 ガヤガヤ型から無関心型まで

一人暮らしのファースト・ステップは、住まい選びから。合格発表が始まると、ヒルトップ2階奥が騒がしくなる。中央大学生協による不動産物件斡旋が始まるのだ。毎年数千人の学生が、この斡旋を利用してアパート・マンションを探しているが、現役中大生がアドバイザーとして一人暮らし経験のアドバイスを含めて協力している。記者もこのアルバイトに参加したことがある。

そのおりの体験を通したエピソードを紹介したい。狭い見聞ではありますが。

新入生の場合、やはり両親と一緒にご来場組が多いですね。一度に案内できる物件は2件のため予めその2件を選んでもらうのだが、その様子を眺めていると、「このおうちは、こんな感じかなぁ」とだいたい見当がつくから不思議だ。

就職試験の面接は入った瞬間で8割決まるというが、来店時の様子を眺めていると、もっと確率は高い？みたいだ。

勝手にタイプ別に分けてみよう。

（1）親Vs子ガヤガヤ型

一番厄介なタイプ（笑）。あれやこれやと物件を探しながら、気づいたら数時間たっていたということも。理由は、入居者と両親の意見が一致しないことが多いため。費用を出すのは親のほうだからで、どうしても

費用に目がいく。一方で入居する当人は、住環境を追及してしまう。価格帯と要望内容がしばしば乖離する。極端な例では、「4万円台でオートロック付きマンション。それに、風呂・トイレ別というのはありませんか」とかね。アドバイザーは「この周辺の相場では……」と、業者に成りかわって〝現実の壁〟をご説明することになるが。ぐるぐる回って、生協の物件に飽き足らず、提携する不動産会社を紹介するときも、あります。

（2）親の鶴の一声型

本人の要望はさておき、とにかく両親が住居を決めてしまう。財布との勝負になることが多い。特に女性の場合は、セキュリティーや近隣環境など両親の心配は大きいから、アドバイザーも学生の実生活例を交えて丁寧に話をする。

「じゃ、安心ね」と、親のリードで決定というケースが少なくない。入居する当人は必ずしも納得していないこともあるわけで、中には住み始めて数カ月で転居する学生もいるという。ちなみに、かくいう記者もそのうちの一人かもしれない。入学後半年で、いまの自宅へと転居した。

（3）「どこでもいいのか！」無頓着型

本人はケータイをいじりながら、われ関せず。母親と来店する男子学生に多いのが、このタイプの特徴だ。わが子の無関心とは裏腹に、親の関心は極めて高く、鋭い質問を投げかけてくることが多い。「ここは、キミが住むんだよ。本当にいいの」と、余りに心配になりこちらから声をかけることも。

とはいうものの、初めての一人暮らしで学生も、親も不安を抱えている。その心配を取り除くことも大切な役回りだ。案内するタクシーの中でも、実際の様子や学生生活を話したりするのだが、中にはいますねぇ。まだケータイに一心不乱の「無頓着」組が。

「学生さんの姿が素敵で、頼もしく感じました」。ときには、アドバイザーにお礼の手紙が返ってくることも。かくいう記者も2回ほどいただいたが、こんな日は職業（アルバイト？）冥利に尽きますね。部屋探しとなると、とかく「情報の非対称性」に泣かされがちだから、それを埋めるための学生のサポート・協力体制、お役に立ててうれしい。

親の一存か？　私のセンスか？＝生協〝アパマン〟コーナー

そうかと思えば、映画NANA主演などで人気の歌手・中島美嘉似の新入生を現地案内したこともある。その数ヵ月後、気がついたら、同じサークルに入会していた。「あら、あの時の」……そんな再会もある。

一人暮らし。うれしくても、悲しくても、寂しくても、家に帰れば一人になる。疲れていても、ご飯は食べたいし、洗濯もしなくては。そう、ときには「津波のような悲しさ、侘しさ」を潜り抜けて、一歩ずつ、みんな大人になっていく。のかもしれない。

余談だが、記者が住むマンションは、同伴出勤（帰宅）？が多い。彼氏、彼女と仲良く手をつなぎながら歩く姿は、実にほほえましくうらやましい。中には、すれ違うたびに相手が違う方も……詮索するのは、やめておきましょう。

清く正しく、浪曼の夢を紡むのもまた、気兼ねなく「一人暮らし」の特権である。

（プライバシーの配慮から、一部匿名にしました）

【学生記者取材班】
池内真由（法学部3年）▽池田園子（同）▽芳賀紫苑（総合政策学部3年）▽滝沢孝佑（同4年）